

人類学研究支援環境 DWB における静止画像を主体にした エスノグラフィーの可能性

岩谷 洋史

神戸大学 国際文化学部

星野 次郎

姫路獨協大学 法学部

大崎 雅一

姫路獨協大学 法学部

森下 淳也

神戸大学大学院 国際文化学研究科

人類学では、エスノグラフィーという手法を用いて研究がなされる。構想したデジタルワークベンチ(DWB)をエスノグラフィーに応用させるために、新たに調査資料を再構成させる機能を追加し、その機能の可能性について検討を重ねてきた。本論文では、このシステムをもとにして写真を主体とするフォト・エスノグラフィーを作成する際の課題を検討する。

Towards Constructing Photo-ethnography on the Digital Workbench for Anthropological Studies

Hirofumi Iwatani

Faculty of Intercultural Studies
Kobe University

Masakazu Osaki

Faculty of Law
Himeji Dokkyo University

Jiro Hoshino

Faculty of Law

Himeji Dokkyo University

Junya Morishita

Graduate School of Intercultural Studies
Kobe University

Anthropologists use the ethnographic methods on the field. We have examined the possibility of a function, which allows the user to reconstruct the materials to apply a planned digital workbench, DWB, to ethnography. In this article, we examine some questions about constructing a photo-ethnography, which is mainly composed of photographs, making use of this system system.

1. まえがき

文化人類学(以下、人類学)の研究者は、通常、自分の関心のあるフィールドを選定し、そのフィールドに数ヶ月から数年に渡って滞在する。そこでそのフィールドで出会う人びとともに生活しながら、フィールドに関する調査データを収集するという参与観察法を用いる。人類学者は、対象である人びとを直接的に観察したり、彼ら/彼女たちから聞き取りしたりして、データを収集し、それらを分析、もしくは解釈しつつ、彼ら/彼女の日常的な行為や活動の意味を探っていく。そして、最終的に報告書や論文という形に結晶化していく。このプロセスは、後に定義するエスノグラフィーと呼ばれるものである。対象とする社会に暮らす人びとについて等身大の情報を得ることが重視され、このことは、研究者である調査者が、インフォーマント(情報提供者)から得た情報を

調査者の視点に立ち、一方向的、かつ、客観的に編集するのではないということを意味している。あくまでフィールドの人びとの立場にたった上で、対象の文化・社会を理解していくことが求められるのである。要するにそこでの記述は、フィールドへの往復、および、インフォーマントとの対話的なやり取りを反復していかなくてはならないという意味で多声的である。

これまで、われわれは人類学的なエスノグラフィーという独特な手法をコンピュータ上で支援していく、もしくは実現させるため、人類学研究支援環境システムとしてのデジタルワークベンチ(Digital Work Bench, 以下、DWBと表記する)を、公開可能なシステムとして構築することを提唱し、システムの設計を行ってきた。このDWBは、データカルチャリング(Data Culturing)という考え方に立脚している[1]。

英語の culture には、「文化」という言葉の他に「洗練」「栽培」という意味が含まれているが、

データカルチャリングとは、すでに格納されたデータ群が培養されていくプロセスだけではなく、そのプロセスにおいて、次第にデータがユーザにとって有意義なものへと至るプロセスをも含んでいる。

DWB は、膨大なデータ集合から、データ相互の関連を見いだす仕組みである。ユーザが既存のデータから読み取った知見をデータプールへと追加、格納することによって、システム内でデータが培養され、増殖していくのである。これは、既存のデータにユーザが新たな意味を与えて構造化していくプロセスであると言える。データカルチャリングでは、ユーザがすべてのプロセスに関与し、構造化し、何らかの解へと到達することを目的としている。要するに DWB は、正規化されたデータが格納されたデータベースを再利用、および再解釈できる土台を提供するものであると位置づけることができる。

このシステムは、当初、調査者が保有する資料を客観情報として入力し、調査者を含めた複数のユーザがそれらに対して、テキストとしてコメント、および解釈などの情報を付与することが可能となるようなものであった。これによって、一方的に情報が提供されるのではなく、複数のユーザが相互に情報を共有することが可能となり、多様な視点に立脚したエスノグラフィーのプロセスが実現させることを期待することができると主張してきた。

本研究は、この研究を継続的に行い続け、とりわけ調査者がフィールドワークで収集する大量の静止画像に焦点をあて、静止画像を対象にした場合、人類学的な研究を遂行させる上で、どのような機能が必要なのか、試験的な実装を含めた上で検討を重ねてきた。

2. エスノグラフィーという手法とそのプロセス

現在、人類学におけるエスノグラフィーの現状は多様性を呈していると言っても過言ではない。まず、その方法論についてみると、現地調査を経て、どのようにテキスト化するのか、そのプロセスは多様である。集約的なインタビュー、サーベイ、日常生活への参加、人びとの行動のサンプル収集などが含まれており、それらの方法を一つの枠組み内に集約することはできない。

では、エスノグラフィーを調査対象の特性で定義できるかと言えば、職場、病院、研究室といった場所を対象とする研究が出現しているように、人類学者はもはや異文化や遠い場所という点で

フィールドとしない、ホームに近い文化的な環境を探究するようになっていく。

ジェームズ・クリフォードとジョージ・マーカスの『文化を書く』[2]は、エスノグラフィーを考える上で、ひとつの転回点となった。本書以降、エスノグラフィーのあり方やその表象の方法と正当性に対して批判的に問われるようになった。人類学という学問分野におけるエスノグラフィーの位置づけは必ずしも確定されたものとはいえない。リンカーンとデンジンは、1990年代初頭時のエスノグラフィーをめぐる状況について「乱雑な時、多様な声、実験的なテキスト、中絶、断絶、正当性と表象の危機、自己批判、新しい倫理的な言説や諸技法」[3]の時代であると述べている。

今日のエスノグラフィーの意味は拡散していると言っても過言ではないが、エスノグラフィーの最大公約数としての意義は、エスノグラフィーのハンドブックのなかで述べられているように「参与観察を基本とした特定の社会的・文化的な場の直接的な経験や探究に根ざしている」[4]である。このことにおそらく多くの人類学者は同意するであろう。ここには、比較的長期に渡り、日常生活のなかに入り込み、人びとと親密な関わりを通じることによって、人びとの様々な信念や行為などを他のどのような方法よりもよりよく理解できるといった一つの仮説があると言える。

ところで、ヴァン＝マーンによるならば、そもそもエスノグラフィーには二重の意味があるということである。一つはプロセスとしての研究方法で、もう一つはプロダクトとしての研究成果物である。研究方法として用いられる際は、エスノグラフィーは参与観察という意味でのフィールドワークを指す。それは通常、長期に渡って研究対象の人びととともに生活していくという態度がとられる。一方、研究成果物であるならば、文字媒体でテキスト化された表象物を意味する。彼は、「現代の文化研究家は後者を強調し、エスノグラフィーをそのトピック、形式、レトリックの特徴から定義するよう見える」と述べている[5]。

小田博志によると日本においては、プロセスとして理解する傾向がある英語圏とは異なり、「民族誌」と訳されるエスノグラフィーは、フィールドワークの成果をまとめた報告書や論文と理解される傾向があったという。小田は、このことを踏まえ、エスノグラフィーは、「社会的場（フィールド）における事象を、そこに固有の関係性の中で理解し、その理解を踏まえながら理論化を展開していく質的方法論の一つ」であることを強調

し、「具体的な描写と抽象的な理論的考察とが一体となったアプローチ」と捉えている[6].

調査者は、各自が設定したテーマに基づいて、フィールドで起こっている出来事や事柄を記述し、分析をする。データ収集と分析は独立したものではなく、同時並行に進められ、その後、まとまった全体像が与えられるようにモデル化を行い、成果として報告書、もしくは論文などの作成を行う。この成果物を出すという最終段階でもって完了する。エスノグラフィーの最終目的は、フィールドで調査者が経験したことをテキスト化することである。データ分析の目標は、フィールドの世界を具体的にテキストとして再現することである。

フィールドでの出来事や事柄は、移ろいやすく、時間的にも空間的にも様々なものが交差し、混じり合った集合体として調査者の目の前に現れる。収集したデータも当然ながら同じようなものとなり、そこでデータを分析、および解釈を施すことで、混沌とした状態から、整理された、ある一定の論理が展開していくシーケンシャルなストーリーを作っていくことが求められる。つまり、人類学的なデータ分析の目標は、フィールドの世界を再構成するという点である。

重要になる思考方法は、少なくとも収集したデータの概念化である。それは、複数の個別的で具体的な事実や事柄に対してそれらの共通点を取り上げ、概略的に説明ができるようにすることである。データを解釈しながら、分類し、概念化を行っていく。それがある程度できたところで、より抽象度をあげていく。また、場合によっては、概念と概念を統合して現象を包括的に見られるようなモデルをつくったりもし、データを構造化していく。

こうした作業は、フィールドと何度も往復することによって進められて行くのであり、そのプロセスを実現させるのは、調査主体である調査者だけでなく、時として他の研究者（意見をj得るなどで）、そして調査対象であるフィールドの人びとである。そうした立場の異なる複数の人たちの参与や関与を通じて、エスノグラフィーは、実現されるのである。したがって、そこには透明な調査主体というのは厳密には存在しないことになるのである。

3. フォト・エスノグラフィー

現在、人類学の研究活動でデジタルカメラやデジタルビデオカメラといったデジタル技術を活用した記録機器やコンピュータを活用するということが一般的になっており、今や、これらの機器は、フィールドワークを遂行するための重要な

道具になっている。これらを駆使できるかどうかによって調査データの収集過程だけでなく、収集したデータを分析する際の方向性も変わってくる。

たとえば、デジタルカメラは、調査者に従来の銀塩フィルムのカメラとは、異なった経験をもたらしている。それはあたかもノートにとるかのよう、写真をとるということを可能にさせたのである。このことは大量の静止画像データが取得できることを意味するが、そのことはシャッターを押して、撮影対象を選択し、シャッターを押すという行為から、写真を選択し、どのように管理していくのかという行為に重心が移っていったと言っても過言ではない。

ここで検討したい一つの課題は、デジタルカメラを用いて収集した静止画像データである写真で、新たなエスノグラフィーが可能であるかどうかということなのである。

写真とは、何らかのメディア（紙やコンピュータの各種記録メディアなど）に撮影者が現在、経験している出来事や事柄を安定化、固定化させたものである。その最大の特徴は、時間が度外視されるということである。それは静止した像としてわれわれの前に現れ、過去の記憶の補助になるとともに新たな記憶を形成させる記録である。したがって、それは撮影者が経験した現実を極度に、現実の情報量を選択的に減らしているという意味で単純化、あるいは抽象化させたものであり、情報内容を型にはめる操作を行っているという意味で形式化させたものであると言えよう。それは撮影者によって経験された現実をありのままに映し出しているのではなく、現実のある一面を再構成しているものである[7].

人類学において写真を活用するという歴史は古く、近代人類学を確立したブロンスラフ・マリノフスキーの時代には、既に写真は重要な調査ツールとなっていたが、1980年代頃から写真そのものを資料として研究対象に据える動きが、人類学、および関連する分野では活発となった。写真は、文字資料には残されていない文化的、社会的な背景を探求したり、画像自体の表象の特質を分析、検証したりする対象として注目されるようになったのである。

しかし、調査資料である静止画像である写真の位置づけは、必ずしも人類学のなかでは明確とは言えない。多くの場合、写真はエスノグラフィーを実現するプロセスにおいて補助的な位置づけしかなくおらず、それ自体がエスノグラフィーのプロセスの議論に関わることはほとんどないと言っても過言ではない。

伝統的な人類学のエスノグラフィーでその中心的な役割を担ったのは、文字である。フィールドでは、記録する作業が行われるが、その大半はノートに書き記すという作業である。しかし、デジタルカメラによって、先に述べたようにノートをとるように、写真をとることができるようになった現在、その視覚的なメディアが文字と同位の地位を獲得するものとして利用することができる方向性を考えてもよいのではなかろうか。そのためには、静止画像としての写真の特性を理解した上で、エスノグラフィーという人類学的な研究手法に中心的にどのように活用していくかということについての理論的な考察を深化させる必要がある。本研究では、写真を中心的に利用したそうしたエスノグラフィーをフォト・エスノグラフィーと定義する。

ここで想定しているフォト・エスノグラフィーとは、一つの写真を提示し、それについて解説していくといったようなものでも、あるいは、いくつかの写真を集めて、単に陳列させたギャラリーのようなものでもない。

フォト・エスノグラフィーとは、エスノグラフィックな研究手法を用いて、複数の写真が集合し、配列されたものであり、それ自体がエスノグラフィーとなる。その集合によって全体として意味をもち、それがまた一つの像をなすものである。全体を構成する写真は、資料的なもの、芸術的なもの、あるいは批評的なものかもしれないが、どのような写真だとしても、調査者のフィールドワークにおける体験で得られた、ある一定の量の写真に対して、さまざまな文脈を考慮しつつ、何らかの論理が介在することによって秩序が与えられたものなのである。そこには、科学的に分析や洞察を施すという態度とそれによる論理的な再構成が重要であると考えている。したがって、通常のエスノグラフィーを作成するのとなら変わらないのである。

4. 静止画像編集システム

フィールドワークを行う人類学者は、静止画像や動画の映像資料、インタビューなどの音声資料、文献資料、標本など多種多様な一次資料をフィールドで収集するが、現在、技術の発展にともなって、デジタル機器で記録する方法が一般的であり、フィールドワークの際の資料収集の方法は従来とは異なった性格を呈してきている。とりわけ写真撮影は最も簡便な資料収集方法の一つであり、大量の静止画像の資料が調査によってもたらされる。

しかし、分析する際において静止画像の位置づけは、必ずしも人類学のなかでも明確ではない。

多くの場合、静止画像はエスノグラフィーの実現において補助的な位置づけしかなされておらず、それ自体がエスノグラフィーの議論の本質に関わることは多いとは言えない。したがって、人類学的な研究において静止画像をいかに活用していくかということについて理論的に考察を深めて行く必要がある。そしてその考察を進めるプロセスにおいて、その可能性をいかに最大限のものへとしていくのか、さらには、静止画像を利用したエスノグラフィー、すなわちフォト・エスノグラフィーをコンピュータ上で実現させることを目指している。

これまで、われわれは、DWBの基本的な設計思想に基づいて、静止画像のデータが格納されたデータベースを利用するユーザの視点を包摂でき、かつユーザが利用するプロセスも把握することができる仕組みを設計し、試験的に静止画像編集システムを構築した。

われわれは、ユーザの視点を静止画像の全体における属性の定義、および、静止画像のある一定領域である部分の属性の定義と考えたうえで、静止画像の任意の部分を選択するシステム、選択した部分に任意の情報を付与するシステム、メタデータをもとにして画像を検索するシステムを構想し、試験運用を試みた。

このシステムは基本的には静止画像に対してアノテーションができ、かつコンテンツの内容に対してコメントなどの情報の関連付けを支援するコミュニケーションの仕組みであると言えるが、いくつかの静止画像を選択して、それらをアノテーションし、部分画像を生成し、その部分画像に対してメタデータを付与していく場合、ユーザはそれらの個々の画像に対してユーザ独自のデータベースの構築をしている感覚でできるようになっている。ユーザがシステムを利用すればするほど、新たなデータが生成され、ここにおいてデータの詳細化が行われる[8]。

5. データの再配列としてのグループ化

このシステムには、画像の任意の部分を選択し、選択した部分画像に任意の情報を付与するというアノテーションの機能の他に、次の2点の機能が追加されている。

まず、検索結果に現れる画像をまとめ、その集合をデータとして再び格納する機能である。そして、検索結果に現れた画像のいくつかを選択し、それらをまとめてデータとして格納する機能である。データをグループ化するという機能をシステムに付加させ、そのモデルを構築し、実装させるということであった。詳細化したデータを俯瞰してみても、これらのサブセットを評価できるシス

テムの必要性を認めた上で、新たにユーザがデータを再構成するシステムを構想した。この機能をわれわれは、グループ化と定義した[9]。

ユーザの利用にともなうデータの詳細化によって蓄積されたデータプールから検索によってもたらされる結果は、その検索条件に合致したデータだけである。しかしながら、そうした結果のなかから、ユーザがさらにある一つの共通項を見出した際に、検索結果によらない隠れた意味が浮き彫りにされる可能性がある。また、別の検索条件によってもたらされたデータのなかには、その共通項に合致したものもあるかもしれない。選択され、分類された、データの配列は、たとえば、写真が撮影された時間や写真に付与されたテキストなどのメタデータによる配列で秩序づけることができる。このシステムにおいては、その配列もユーザが自由に、再配列をすることが可能となるような仕組みを考案している

そのような検索のプロセスを経て、共通項でくることができるデータの集合体を再びデータプールのなかへと格納させることができるならば、フィールドにおける状況を分析する、つまりエスノグラフィーを実践することによって、有効であると考えている。

6. フォト・エスノグラフィーの実現

このグループ化を導入することで、どのようなことが実現可能になるのか。具体的に示すために、日本の伝統的産業である清酒業を対象にした調査に基づいて得られた写真資料である。

フィールドワークにおける中心的なテーマは、酒造現場において作業員たちはどのようにして協同的に日本酒を作っているのかを浮き彫りにすることである。そのために、まずは酒造現場で作業に関与する行為者と道具・機械類、また行為者間や行為者と道具・機械類のインタラクションに注目することが必要になってくる。

酒造はいくつかの部分に分けることができる以下のような工程でおこなわれる。まず、玄米を精米することで白米にする。この白米を洗米し、これを蒸して蒸米にしていく。この工程は原料処理工程である。

続いて、蒸し上がった蒸米に麴菌を植え付け、麴を造る製麴工程が続く。そして、麴に水を加え、酵母を添加した後、さらに蒸米を加え、一定期間発酵させる酒母工程が続く。酒母とは、酒を発酵させる酵母を増殖させるための酵母の培養液で、この工程で麴の酵素によって生産されたグルコースは酵母のよってエチルアルコールに変えられる。

酒母工程に続いて、醪工程となる。ここでは麴と蒸米は3回に分けて投入され、この工程のことを「仕込み」と呼ぶ。まず、醪用タンクに酒母を入れ、それに水を加えながら、麴と蒸米を四日間かけて、麴と蒸米を三段階に分けて加えてゆく。最初の仕込みは初添（ハツゾエ）と呼ばれる。次の日は踊り（オドリ）と呼ばれ、この日は何も投入されず、仕込みはされない。この踊りのときに酵母の増殖が促されるということである。そして、次の仕込みが仲添（ナカゾエ）、最後の仕込みが留添（トメゾエ）と呼ばれている。そして仕込み後、およそ15日から30日かけて発酵させる。発酵が終了した醪を搾り、加熱殺菌や調合、精製濾過などといった工程を経て、日本酒として出荷される。

こうした複数の工程において労働力を一気に投入することで清酒は作られるが、酒母工程、製麴工程、醪工程といった何段もの複雑な工程は、酒蔵における各工程の所定の場所で行われ、作業員は各工程でその工程に適した道具・機械類を利用しながら作業を進める。言い換えるならば、人間と道具・機械類が複雑なネットワークを形成しているのである[10]。

先述したテーマのもとで酒造現場のエスノグラフィーを完成させるためには、この作業員の身体と身体を取り巻く環境との相互作用を全体的かつ生態学的に記述することから始められると考えられる。

しかしながら、作業は基本的に分業体で行われるため、人や物の流れの全体像を鳥瞰的に把握するのは作業員だけでなく外部者である調査員にとっても難しい。ある時間をとってみると、複数の作業員は同じ道具を使い、同じ動作をおこなっている場合もあるけれど、多くの場合は、同じ道具を使いながら違う動作をおこなっていたり、違う道具で違う動作をしている。そこでフィールドで収集された大量の静止画像を活用すれば、それも可能になるのではないかと期待できる。

フィールドで得られた写真は、現場の状況全体が映し出されており、そのなかには調査員が意図しないものまで写っている場合が多くからである。たとえば、作業員が酒造の文脈で何かの道具を利用して作業を行っている写真があるとしよう。その道具は、アノテーションによって、切り取ることができる。「麻布」「洗米用袋」「温度計」は、それぞれ個々の文脈、酒母工程、製麴工程、醪工程などなどの酒造工程に位置づけられる。

また、これらの道具・機械類は、作業において利用する者も決まっている。このときアノテーションされた部分画像は、各々の工程のどの段階、あるいは特定の作業員と関連づけることができ

る。その際、システムのグループ化の機能を利用してそれを示すこともできるだろう。

このように酒造現場の人間と道具・機械類との関係性の描写は、システム内で十分に実現しうるものであると考えられる。ユーザは、フィールドワークを継続していく過程で、システム内により詳細な、かつより豊かな静止画像のネットワークを形成することになるだろう。たとえば、ある特定の道具が、誰によって、どのような状況で利用されているのかを知りたい場合には、検索システムを利用して知り得ることができるだろう。要するに、このシステムは、人類学的なエスノグラフィーの作成プロセスとエスノグラフィーそのものをデータの関係性を構築させることで、コンピュータ上で実現したものであるということが出来る。構築したシステムを利用して、調査者であるユーザが仮に酒造現場を作業者と道具・機械類のネットワークとして鳥瞰的に描写するという目的をもって利用するとしよう。まず、ある特定の道具・機械類がどの酒造工程の文脈で利用されているのかを把握する必要がでてくる。ユーザは格納されている静止画像を閲覧して、その道具・機械類が利用されている画像を発見し、アノテーションによってその道具・機械類が写っている部分を切り取る。この作業を繰り返し、その特定の道具・機械類が写っている画像をグループ化させて、該当する酒造工程の文脈に位置づければ、どのような文脈で利用されているかが把握される。また、これらの道具・機械類は、しばしば作業者も決まっており、作業者と道具・機械類との関係を把握したいときは、アノテーションした画像をグループ化させることによって特定の作業者と関連づけることができる。

このようにユーザはシステムを利用していくなかで、徐々にシステム内に静止画像のネットワークを作成することになる。これは言い換えれば、静止画像を利用してエスノグラフィーをコンピュータ上で実現したものであるといっても過言ではない。

7. フォト・エスノグラフィーの課題

本研究では二次的な利用に着目して、アーカイブに格納されている一次資料から作成される二次資料を統括的に扱うデータモデルをDWBと名付け、提案し、システムを構築し、試験的な運用を重ねてきた。DWBは、アーカイブからデータをリンクの形で引用し、そのリンクに加えて独自のデータを付与し、新しいデータとして登録することで、その研究過程で得られた情報を再利用可能とすることを目的としている。

特に、静止画像に焦点を当て、静止画像の利用方法に関する考察を重ねてきた。そのなかで次第に浮き彫りになってきたのは、エスノグラフィーを実現すべく、人類学的な研究において静止画像を焦点に当てる意義などの再考察を踏まえつつ、システムの設計、および再設計をおこなっていく必要性である。

先述したように、システムの内部では、画像のネットワークが形成されることが考えられる。これ自体をエスノグラフィーと考えることは可能かもしれない。ただし、伝統的な人類学的な研究成果物としてのエスノグラフィーは、図書や論文、あるいは報告書という形態にしる、下位分野の映像人類学で作成されるエスノグラフィック・フィルムにしる、調査者の解釈や分析結果を経ての、シーケンシャルな構造をもっているものである。要するにストーリーラインがあり、そのストーリーラインに沿って、起承転結があるのである。エスノグラフィーを受容する読者、あるいは視聴者は、通常は前後関係を把握しながら、一方向的に情報を享受し、読むという行為を実践することになる。このストーリー展開において、たとえばフィールドワークで収集した具体的なデータを記述する際に、提示する順番も大事になり、順番が異なると、異なった印象を読者や視聴者に与えることになる可能性もある。

このことを考えるならば、システム内部で実現されうるといえるのはエスノグラフィーとは呼び得ないのであり、研究成果物としてのエスノグラフィーに至るまでのプロセスの一段階とも言えるのである。

今後は、問題点を整理しなおしたうえで、写真の存在論的な意義の考察を深めた上で、フォト・エスノグラフィーを実現させるためのシステム設計へフィードバックしていく必要があるだろう。

参考文献

- 1) 本村康哲, 川上聡, 川村清志, 森下淳也, 大崎雅一: 人類学における研究支援環境としてのデジタルワークベンチ, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集(じんもんこん 2003), Vol. 2003, No.20, pp.219-226 (2003) .
- 2) Clifford, J, and Marcus, George E. : Writing culture : the poetics and politics of ethnography, University of California Press, Berkeley and Los Angeles(1996). 春日直樹他(訳) : 文化を書く, 紀伊国屋書店 (1996) .
- 3) Denzin, N. and Y. Lincoln (Eds.) : Handbook of Qualitative Research, pp.581, Sage, Thousand Oaks(1994).

4) Atkinson, P., Coffey, A., J., Delamont, S. et al.(Eds.) : Handbook of Ethnography. pp.2, Sage, London(2001).

5) Van Maanen, John. : Ethnography. In Adam Kuper and Jessica Kuper (ed.) : The Social Science Encyclopedia(2nd ed.), Routledge, London, pp.263-265(1996).

6) 小田博志：「現場」のエスノグラフィー—人類学的方法論の社会的活用のための考察, 国立民族学博物館調査報告, Vol.85, pp.11-34(2009).

7) 荒金直人：写真の存在論—ロラン・バルト『明るい部屋』の思想, 慶応義塾大学出版会, (2009)

8) 岩谷洋史, 川村清志, 星野次郎, 行木敬, 大崎雅一, 森下淳也：人類学研究支援環境 DWB による調査資料の詳細化と客観化—部分と全体の視点を許容する DWB, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 (じんもんこん 2007), Vol.2007, No.15, pp.107-114 (2007) .

9) 岩谷洋史, 川村清志, 星野次郎, 大崎雅一, 森下淳也：人類学研究支援環境 DWB における調査資料のグループ化による再解釈, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 (じんもんこん 2009), Vol.2009, No.16, pp.325-330 (2008) .

10) 岩谷洋史：仕事場における資源としてのインスクリプションの役割—酒蔵を事例として, ソシオロジ, Vol.53, No.1, pp.55-72 (2008) .

